

3歳児の集団保育の意義

- 記憶に止まるものについて -

川村 晴子

大阪女子短期大学

1 問題

日本保育学会第45回大会において3歳児の自主保育グループの実践報告を行い、3歳児の集団保育の意義について考察した。この保育グループの活動は1970年に始まり、本年度末で28年間継続し、1970年度の卒園児はすでに31歳になり日本社会の中堅として活躍している。

保育に携わる者として、3歳児の保育が本人の人格形成にどのような影響を及ぼしたのか明らかにしたい問題である。しかし3歳以後の家庭環境、教育環境、社会環境などさまざまな要因が存在しており、3歳の時期の教育効果を規定するのは至難の業である。

そこで3歳当時を思い返して「思い出せること」すなわち本人の記憶として止まっていることは何かを明らかにすることによって、長期間その人の意識下にあるものの中に、3歳児保育として重要な要素が存在するのではないかと考え今回の研究に取り組んだ。また対象年齢が31歳から5歳まで広範囲であり、回答能力にも問題があるので、保護者にアンケート調査記入を協力してもらい、また3歳児保育に対する評価を明らかにすることによって、子どもの教育に対する親の考え方を検討する。

2 研究方法

自主保育グループ「ひまわり」の保育についてアンケート調査を行う。

対象: 1970年~1996年の卒園者と保護者616世帯に郵送。

時期: 1997年10月15日~1997年11月25日

内容: 以下の質問に自由記述する。

◊ 卒園者に対しての質問

「ひまわりグループについて記憶していることがあったら何でも書いてください。」

◊ 保護者に対しての質問

「ひまわりグループの教育でよかった点は何ですか。」

アンケート有効回収数131通(回収率 24.9%)

自主保育グループ「ひまわり」の保育形態:

3~4歳児 22名 週1回 時間 8:30~11:30

保育者 3名 場所-M絵画研究所/T教会

3 結果と考察

① アンケート集計結果を表1に示す。

1970年から1996年間を I 期='70~79, II 期='80~89, III

期='90~96とし、それぞれの回答数は表1の通りである。

表1 アンケート回答数

期間	I 期	II 期	III 期	計
数(%)	35 (26.7)	37 (28.2)	59 (45.0)	131

② 卒園者の記憶について

卒園者の記憶を自由記述した文章から共通項を拾いだし各期別、各項目毎に整理したものを図1に示す。

〔全体〕

全体として記憶に残っていることは、1位遊び(46.5%)2位いろいろな行事(41.2%)3位おやつ(24.4%)である。遊びは絵を描く・粘土・積み木・歌・製作・オモチャ・ダンス・ブロック・お話し・トランポリン・平均台・紙芝居など。行事は運動会・誕生会・クリスマス会・遠足・お別れ会などである。おやつはおやつの時間全体やそれぞれの食品名を上げている。

〔I期〕

I期の卒園者の年齢は、22歳から31歳に亘り、3歳当時の記憶ははるか遠い過去となり、思い出せる事柄はかなり少ないと考えられる。しかし思い出せる事柄があるとすれば、その人にとって大切な思いであり人格形成に深く関わるものであろう。

記憶の1位は遊びで42.8%、2位はおやつで31.4%、3位は空間感で25.7%、4位行事で22.8%である。1期の特徴的項目として空間感が上げられる。これは「教室が大変広かった」(31歳)「通園時に乗ったバスのシートの色」(29歳)「階段と天井が高く木の床だった。壁に大きな絵が掛かっていた。」(28歳)「天井の高い教室と床の木の匂いや絵の具の匂いが好きだった。」(26歳)「ちょっと薄暗い雰囲気だった。」(23歳)などであり、大人になった現在も当時の自分を包みこんでいた懐かしい空間の感覚や匂いや色を呼び覚ましている。また「乾布摩擦の朝起きてタオルで体が赤くなるまでこするのが楽しかったこと」(26歳)と皮膚感覚をも思い出している。

1位の遊びの内容は、「絵を描く」が最も多く、「床に大きな紙を広げて絵を描いたこと」(23歳)「はり絵をしたこと」(23歳)などが具体的な表現である。ついで歌・スキップ・積み木・製作遊びなどであり、これらも身体運動感覚や色彩感覚・手先を使う皮膚感覚などと関連している。2位のおやつを思い出すのはまさに味覚に関する記憶である。これらの感覚は人間の五感に記憶さ

れたものであり、3歳当時の経験の記憶は主に感覚的な事柄が多いといえる。

1期の中で1例特異な文章があり、幼少期と青年期の心の在り様の違いを的確に指摘するものである。すなわち「日々思っていることを歌にし、絵にし、お祈りの言葉にすること。歳月は自分の思いを飾らず、真っすぐに伝える行為を消極的に行っています。(中略)当時“今日は○○君がお休みでした。早く良くなりますように”と声をそろえてお祈りしたこと。今は1人でそれを実行しなければならない。人を思いやる気持ちを恥ずかしがらず、素直に体の外へ出せたら、自ずと心は開けてくるのではないかでしょうか。(中略)ひまわりグループの思い出は、私が子どものころ持っていたもの、そして今忘れかけているものを気づかせてくれる、困った時に開く薬箱のようなものです。」(25歳)という。3歳のころの暖かい思い出が、青年期の心の悩みや傷を癒す薬箱の役割を果たせる事例である。

[Ⅱ期]

この期の卒園者の年齢は、12歳から21歳に亘り、中学生から大学生である。記憶の1位は行事(48.6%)、2位遊びとおやつ、いずれも27.0%である。それぞれの内容は1期と同じ傾向である。4位が空間感(10.8%)で、「絵や彫刻があった」(18歳)「床に明いた穴にドングリなどを入れるのが楽しかった」(15歳)「いすが円状に並んでピアノが端にあった」(14歳)「運動会をした場所の周りの景色が良かった」(13歳)など。穴や隠れたものに対する好奇心は子どもの心の成長にとって重要な要素である。

[Ⅲ期]

この期の卒園者の年齢は、5歳から11歳に亘り、幼稚園児から小学生である。記憶の1位は遊び(61.0%)2位行事(47.5%)3位おやつ(18.6%)である。空間感についての記憶は0であり、記憶が近い過去だけに具体的な遊びの記述量の多いことが特徴的である。特に遊びの記憶36人中11人が粘土遊びを楽しかったとしており、手や指の感触が記憶として残っていると思われる。

③ 保護者の保育に対する考え方について

「ひまわりグループ」へ子どもとともに参加した母親が、3歳児の保育にどのような評価をしているかを明らかにすることによって、子どもの教育に関する考え方を検討する。

[全体を通して]

1位は「保育の本質」に関わる記述であり70.2%、2位は「子どもの成長に役立つ」で35.9%、3位は「幼稚園入園前の時期に集団生活を経験することができて良かった」

で32.1%である。母親たちは、3歳の時期の集団保育にたいして、保育の本質を良く把握して評価している。特にⅢ期の母親は実に多様な表現で保育について記述している。たとえば「子どもの個性を大切にしている」「子どもの気持ちをよく汲んでいる」「愛情深い/暖かい/穏やか/自由でのびのびした保育」「ゆったりした時間だった」「先生の笑顔と優しい態度」「手作りの/心のこもった教育」「一人一人ほめて接する保育」などであり、少人数のゆったりした保育を評価していることが分かる。

幼稚園入園前の1年間を週1回の集団保育の活動によって、親も子どもともに家庭を一歩出て他の子どもたちと一緒に遊び、先生と出会い、さまざまな活動を通して成長する時間を共有したと考えられる。

4まとめ

3歳児の集団保育の経験が、子どもの心の成長にどのように関わっているか、アンケート調査によりその記憶を調べた。22歳以上の群で特徴的に空間感覚・嗅覚・触覚に関する記憶を持つものが多く、全体としては、体を使って遊んだ種々の遊び、季節それぞれの行事、そしておやつの時間の楽しさが記憶の主たるものである。幼児期の保育は、感覚器官に強い影響を与えるものであると考えられることから、子どもを取り巻く人的的環境は十分吟味し、良い環境設定をすることが重要である。保護者の保育の評価は、保育の本質をとらえた的確なものであり、子どもの教育に理解を示している。特に3~4歳の子どもの保育については、一人一人の個性を大切にしながら、ゆったりした時間の流れの中で、子どもの感性を豊かに育む環境を用意することが重要である。

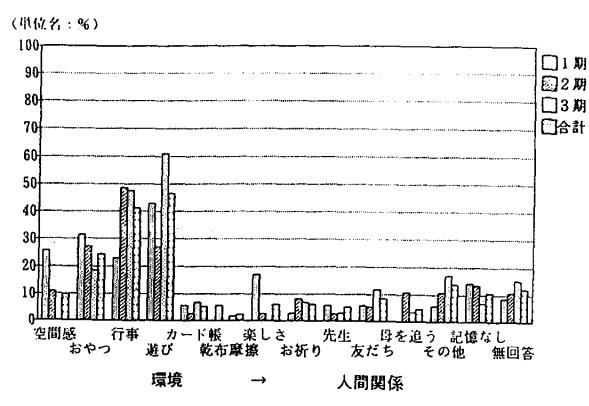


図1 本人の記憶